

フィンランドにおける2つのジャポニスム —ガッレン=カッレラとアルヴァ・アアルト—

人 見 伸 子

プロローグ

- I. 19世紀後半から20世紀へ：独立への道
 - I-1. ナショナル・ロマンティシズムの台頭
 - I-2. 叙事詩「カレワラ」とガッレン=カッレラ
 - I-3. 万国博覧会の時代
 - I-4. 自然への憧憬
 - II. 1930年代：新しいデザインの誕生
 - II-1. アアルトの建築
 - II-2. アアルトのインテリア・デザイン
- エピローグ

プロローグ

本年2019年は、日本とフィンランドが外交関係を樹立してから100年の節目の年にあたる。ロシアとスウェーデンという2つの大国に挟まれたフィンランドは、長い間両国の支配下にあった。スウェーデンの一部だった時期が650年以上続いた後で、1809年にはロシア帝国に併合され、自治権をもつ大公国となった。ロシアの東方進出はすでに16世紀に始まっていたが、19世紀になると促進され、シベリアやアラスカはフィンランド人を含む入植者によって開拓され、やがて日本へも眼が向けられる。幕末に多くのロシア船が蝦夷地に来航し、日本への進出をうかがっていたのは周知の通りである。日本とロシアの利害対立はその後1904年の日露戦争をもたらし、ロシアの敗北が1917年のロシア革命につながっていく訳だが、それはまたフィンランドの独立を意味した。

1917年の12月6日、フィンランド議会在独宣言を承認し、翌年には独立が他国からも認められた。日本もその動きに加わり、1919年5月に両国の外交関係が正式に樹立し、初代駐日代理公使としてヘルシンキ大学でアルタイ語を教えていたラムステッド教授が派遣された。両国の文化的

交流は、1935年に設立された「フィンランド日本協会」によって促進されることになった¹。

ところで音楽・美術を中心にした両国の文化的交流はとくにここ数年、さまざまな形で検証されている。美術の分野では2016年2～5月にかけてヘルシンキ、アテネウム美術館で開催された「北欧諸国におけるジャパノマニア 1875-1918」²、それを継承する形で本年、同美術館で開催された「静寂の美—北欧と東アジアの相互交流」³、日本側がそれに呼応する形で開催した国立西洋美術館の「モダン・ウーマン—フィンランド美術を彩った女性芸術家たち」⁴、小海町高原美術館の「北欧の灯り展：照明デザインから見る灯り文化」⁵、そしてフィンランドでは北欧初となる手塚治虫の展覧会⁶も、ヘルシンキの北に位置するタンペレで開催と聞く。

美術の分野で両国の関係を考えて場合、ポイントになる時期が二つある。ひとつはフィンランドで独立の機運が高まった20世紀初頭、フィンランドの民族的叙事詩「カレワラ」が編集され、文学・美術・音楽の世界で「ナショナル・ロマンティズム」の運動が盛んになった時期である。アルベルト・エーデルフェルト（Albert Edelfelt, 1854-1905）やアクセリ・ガッレン=カッレラ（Akseli Gallen-Kallela, 1865-1931）、エーロ・ヤルネフェルト（Eero Järnefelt, 1863-1937）、ペッカ・ハロネン（Pekka Halonen, 1865-1933）などの画家たちが自国の歴史や自然の美しさを再認識した時期だが、それはまた彼らが日本文化を知り、その影響を受けた時期とも重なっている。そしてもうひとつは「フィンランド日本協会」が設立された1930年代である。協会の設立メンバーの一人だった建築家アルヴァ・アアルト（Alvar Aalto, 1898-1976）を中心に、日本文化に影響を受けた芸術家が次々に現れた。この2つの時期に活躍したフィンランドの芸術家や建築家を中心に、フィンランドにおける日本文化の影響、すなわち2つのジャポニスムについて考察するのが、本論の目的である。

I 19世紀後半から20世紀へ：独立への道

1. ナショナル・ロマンティズムの台頭

19世紀後半から20世紀初頭に登場する「ナショナル・ロマンティズム」の運動はフィンランドのみならず、北欧諸国やエストニア、ラトヴィアといったバルト海沿岸の国々でも見られた現象である。「エッダ」「サガ」などの北欧神話への関心が高まり、民族独自の文化を再認識し、ヨーロッパ大陸の主要国とは異なる自国の価値観を意識した。それはちょうど日本が開国し、明治という新しい政治体制の国に生まれ変わり、日清・日露戦争を通してアジア大陸への眼が開かれた時期とも重なる。

「ナショナル・ロマンティズム」が眼に見える形で最も明確に表現されたのは、建築の分野であろう。たとえばフィンランドを例にとると、ヘルシンキ市内にあるフィンランド国立博物館⁷、同市内にあるポホヨラ保険会社ビルディング、ヘルシンキ近郊エスポーに画家ガッレン=カッレラの自宅兼アトリエとして建てられた「タルヴァスパー」⁸、そして内陸部タンペレにあるタンペレ大聖堂⁹など、まさにこの時期1900～10年代に主要な建物が次々に建設された。北欧以外に眼を

転じると、たとえばイギリスではすでに18世紀後半に中世建築への関心が高まり、「ゴシック・リヴァイヴァル」の代表例として知られるロンドンの国会議事堂が、ピュージン等の設計で1844～52年に建設されている。前述のフィンランドの建築群も基本的には中世の大聖堂や城を手本にしているが、たとえばフィンランド国立博物館ではエントランス・ホールに民族的叙事詩「カレワラ」のフレスコ画が描かれ、建物の内装はアール・ヌーヴォー様式が用いられている(図1)。また「タルヴァスパー」の暖房は炉辺が使われ、その屋根には北欧の建築によくある木片を用いるなど、フィンランドの文化や建築様式を巧みに取り入れる工夫がなされている(図2)。

「ナショナル・ロマンティシズム」はまた、民族の歴史への関心を呼び起こした。フィンランドの場合、それは「カレワラ」(Kalevala、カレヴァラ)の編集と出版という形で成就することになる。もともと国内のさまざまな地域に伝えられた民話があり、伝統的な撥弦楽器カンテレの演奏に合わせて語り継がれていた¹⁰。一時期、消滅の危機にあった民話を集め、一貫性のある物語として編集したのがエリアス・リョンロート(Elias Lönnrot, 1802-84)¹¹で、1835年2巻32章からなる「カレワラ」というタイトルで出版された。天地創造の物語で始まる「カレワラ」だが、その主役となるのはワイナミョイネン、イルマリネン、レンミンカイネンといった超人的な力をもつ英雄たちである。中でも広大な知識と魔法の力を持つ白い髭の老人ワイナミョイネンは圧倒的な存在感で物語をリードし、「カレワラ」は叙事詩としてホメーロスの「イーリアス」にも匹敵すると当時から評価された¹²。民族意識が高まった同時代の知識人や芸術家たちが「カレワラ」あるいはワイナミョイネンに魅了されるのは当然の帰結であり、作曲家シベリウス(Jean Sibelius, 1865-1957)や画家ガッレン=カッレラにはこの民族的叙事詩からインスピレーションを得た作品が複数ある¹³。

2. 叙事詩「カレワラ」とガッレン=カッレラ

ガッレン=カッレラはシベリウスと同じく1865年生まれのフィンランドを代表する画家であり、作曲家ともジャンルを超えて非常に親しい関係にあった。二人はともにスウェーデン語を話す上流階級の出身であり、「ヌオリ・スオミ Nuori suomi (フィンランドの青年)」というグループで出会う。「ヌオリ・スオミ」は自国の文化について語り合い再評価しようとする若者たちのグループで、ガッレン=カッレラは当初からのメンバーであり、シベリウスは1890年代前半グループに出入りしていた¹⁴。ガッレン=カッレラの油彩画《シンボシオン(饗宴)》(1894年、個人蔵)では画家自身とシベリウス、音楽家仲間が議論を重ね、酔い潰れる様子がリアルに描かれていて興味深い。

ヘルシンキの北に位置するヤルヴェンパーには、シベリウスが1904年から54年に没するまで家族と住んだ家「アイノラ」があり、現在は記念館として一般に公開されている。ここにはシベリウスが生前使っていた家具やピアノがそのまま遺され、一部屋の壁にシベリウスの肖像と風景を組み合わせた絵が飾られている。ガッレン=カッレラが手がけた本作のタイトルは《エン・サガ(ある伝説)》(1894年、図3)で、シベリウスの最初の交響詩¹⁵と同名であり、音楽を聴いた際の印象が具象化されたものと考えてよいだろう。画面は3つの部分から構成されている。画面右の縦長

のパネル (31 × 17cm) には20代の若々しいシベリウスの姿が写實的に描かれている。左側は上下に分かれ、上部 (24 × 30cm) は鮮やかな色彩を用いて風景が描かれ、下部は金地のパネルである。一応「トリプティック (三連画)」の形式を取っているが、枠組みが太いせい、日本の屏風や襖のようにも見える。とくに左側の風景は奇妙で、森と湖の情景に雪の結晶が舞って冬景色のようであるが、その右側に眼を転じると赤い地面 (岩) に曲がりくねった松が生え、その緑の葉と柑橘系の果物の黄色はより暖かな季節を連想させる。ひとつの画面に秋と冬といった複数の季節を描き込む、日本の「四季図屏風」にも通じる感性である。こうした複数の画面を用いる手法は、すでに1891年の三連画《アイノ神話》(図4)で採用されている。こちらも「カレワラ」に基づく作品で、主人公ワイナミョイネンが美しい娘アイノに求婚するが、拒否される場面が描かれた。金地のフレームには「カレワラ」の該当部分が引用され、文字とイメージの一体化が図られている。

「カレワラ」を主題とするガッレン=カッレラの絵画でとくに注目すべきは、木版画《サンポの防衛》(1895年、図5)であろう。「魔法の白」サンポをめぐり、怪鳥に姿を変えたポホヨラの女王と争うワイナミョイネン。見得を切ったようなポーズで剣を振り上げる姿はどこかユーモラスであり、日本の武者絵を思い出させる。また強調された輪郭線や波の表現にも、日本美術との関連が考えられる。国立西洋美術館で開催された「北斎とジャポニスム展」では、この木版画が葛飾北斎(1760-1849)の『北越奇談』挿絵(1813年、図6)と比較されていた¹⁶。荒波に翻弄される舟や右上から現れる怪物、そして何よりも力強い輪郭線で構成されたモノクロの情景は、確かに北斎作品に通ずるものがある。またワイナミョイネンの独特のポーズは、たとえば歌川国芳(1798-1861)の一連の武者絵と比較する価値があるだろう。ガッレン=カッレラはこの主題が気に入ったのか複数のマチュールを用いて描いているが、1896年のテンペラ作品(トゥルク美術館、図7)の色彩感覚や主人公のポーズは、国芳の錦絵《耀武八景・石橋山秋月》(1843-47年、図8)と共通している。「カレワラ」あるいは日本の戦記物に登場する命がけて敵に立ち向かう英雄の姿は、画家たちの想像力をおおいにかき立てたのである¹⁷。

それではガッレン=カッレラは、どこで日本美術と出会う機会があったのだろうか。この当時フィンランドを含めた北欧の多くの画家が、フランスで絵画制作を学びながら、互いに交流していた。ガッレン=カッレラも1884～89年たびたびパリを訪れ、アカデミー・ジュリアンで学んでいる。この時期はフランスでジャポニスムが最も流行した時期と重なり、浮世絵など多くの日本美術が出回り、モネの《ラ・ジャポネーズ》(1876年、ボストン美術館)のように、その影響を受けた作品が数多く誕生した。画家も日本の文物を扱ったピングの店や1889年のパリ万博で浮世絵を眼にしたり、入手する機会が充分にあったと考えられる。とくに北斎と国芳はともに幕末に活躍した浮世絵師であり、多数の作品が海外に出回っていたので、その可能性は大きい。また現在エスポーにあるガッレン=カッレラ美術館には、江戸中期の浮世絵師・長谷川光信の版本が所蔵されており、画家自身が日本美術を所蔵していたことがわかる¹⁸。版本はモノクロであり、色鮮やかな錦絵に比べると注目度は低い、ストーリー性と自由闊達な描線は北欧の画家たちにとっても魅力的に映った

に違いない。

3. 万国博覧会の時代

ガッレン＝カッレラが誕生し、画家として活躍する19世紀後半から20世紀初頭は、西欧諸国が国力を充実させ、海外に眼を向けて国際化する時期にあたり、各国で万国博覧会が開かれた時代でもあった。各国の産業の成果を知らしめる「万国博覧会」が最初に開催されたのは、1851年ハイド・パークを会場とするロンドン万博である。それ以降、欧米各国で開催が相次ぎ、パリでは1855年からほぼ11～12年毎に複数回、万博が開かれた。日本も1867年の第2回パリ万博に江戸幕府や薩摩藩が初めて参加し、明治政府に代わってからも国の威信をかけて、積極的に工芸品等を出品するようになった。この章ではガッレン＝カッレラたちフィンランドの画家が訪れたであろう1889年の第4回、および1900年の第5回パリ万博に注目することにする。

1889年の第4回パリ万博は「フランス大革命100周年」を記念して開催されたもので、シャン＝ド＝マルスにはエッフェル塔が建設され、各国植民地のパヴィリオンが立ち並んで、非西欧的なものへの関心が高まった¹⁹。また万博では600点を超える日本の物品が展示されたが、中には錦絵や版本も含まれ、その多くはジークフリート・ビング (Siegfried Bing, 1838-1905) やルイ・ゴンズ (Louis Gonse 1841-1926) のコレクションから出品されている。そして西欧の芸術家たちに多大の影響を与えた3カ国語の雑誌『芸術の日本』(1889-91) がビングを中心に刊行されたのも、まさにこの時期であった。

一方1900年の第5回パリ万博は19世紀最後の国際的祭典にふさわしく、約7ヶ月の会期中に延5100万人の観客が訪れたという。会場の至るところで電気が使われ、「アール・ヌーヴォー」という新しい装飾様式が注目された。この当時フィンランドはロシア帝国の支配下にある大公国であったが、交渉の結果、パヴィリオンを建て万博に参加することが可能になった。建物の丸天井の装飾を依頼されたのがガッレン＝カッレラで、彼は「カレワラ」の主題でフレスコ画を制作し、フィンランドの歴史や人々の生活、そして独立への思いを絵の中に盛り込んだ。またフィンランド館に作られた「アイリスの間 Iris Room」の家具やテキスタイルも制作している。彼のフレスコ画や家具は万博で受賞し、フィンランドの芸術さらには国そのものへの関心が高まり、独立への動きを後押しすることになった²⁰。ちなみにフィンランド国立博物館のエントランス・ホールの丸天井に同主題のフレスコ画が制作されたのは、独立後1928年になってからである (図9)。

4. 自然への憧憬

これまでフィンランドを代表する画家ガッレン＝カッレラの「カレワラ」主題の作品を中心に見てきたが、彼にはストーリー性がなく、純粹に自国の豊かな自然を描いた作品も多数ある。たとえば《野生のアンジェリカ》(1889年、アテネウム美術館)、《湖の情景》(1901年、同館)、雪景色の《オオヤマネコの巣穴》(1906年、セッラキウス美術財団) など、周囲の自然に着想を得た風景画を描

いているが、いずれも縦長の画面であるところが興味深い。江戸時代の後期、北斎と並んで人気のあった浮世絵師・歌川広重（1797-1858）は晩年「名所江戸百景」（1856-59）のシリーズを残したが、こちらも風景画としては異例の縦長の画面を採用している。そのひとつ《堀切の花菖蒲》（図10）では花菖蒲が前景にクローズアップされ、花や葉茎の一部が大胆にカットされている。さらに彼方には菖蒲畑や松並木が見え、視線は空へと導かれるが、前景と遠景をつなぐ役割を果たすのが水の存在である。一方ガッレン=カッレラの《野生のアンジェリカ》（図11）でも同じように前景に植物をクローズアップし、遠景との間に湖水を配置して見事に全体のバランスを保っている。ゴッホが「名所江戸百景」を模写したことが知られている²¹が、ガッレン=カッレラはより間接的に、広重の浮世絵の意匠を巧みに取り込んだといえよう。《湖の情景》でモチーフを垂直方向に並べて遠近感を演出する技法や《オオヤマネコの巣穴》における雪の表現（伝統的な西洋絵画で雪景色はまれ）など、ガッレン=カッレラは日本の風景表現の工夫がさりげなく吸収している。

前述したフィンランドの画家ハロネンやヤルネフェルトもほぼ同時期にパリで学んでおり、彼らの風景画にも日本美術との関連がうかがえる。たとえばハロネン《雪に覆われた松の若木》（1899年、図12）は『北斎漫画』第4篇にある雪を被った木々の構図と類似しているし²²、ヤルネフェルトが描いた縦長の俯瞰的な風景画は日本の「掛け物」や広重「名所江戸百景」の構図を想起させる。北欧のジャポニスムは国内に日本の事物が入る以前に、フランスで日本美術を見聞したり、モネやゴッホなど日本美術に着想を得たヨーロッパの画家たちの作品に触れることで始まったと考えられる。日本美術の影響は絵画のみならず、応用美術にも及んだ。たとえばヤール・エクルント（Jahr Eklund, 1876-1962）のルイユ織²³のラグ（1904年頃、図13）は、一見すると記念碑のような堅固な構図に思えるが、上部の碎ける波は北斎の《神奈川沖浪裏》につながるモチーフである。元来のデザインを抽象化し、自己のものとして同化する技は、フィンランドが20世紀を通して「デザインの国」として国際的な評価を得る上で、重要な要素となっていくのである²⁴。

II 1930年代：新しいデザインの誕生

1. アアルトの建築

20世紀初頭のフィンランドにおいて、デザインおよび建築の分野で最も影響力の大きかったのは、アルヴァ・アアルトであろう。ヘルシンキの市街地から西へ向かい海に近いムンキニエミ地区に、アアルト自身が設計した自邸兼事務所（1935-36年）が遺され、一般公開されている。外壁は一部を除くと白く塗られた鉄筋コンクリート製で、周囲の樹木の緑がよく映えるが、内部は木や布、繊維マットなどさまざまな素材で構成され、ところどころに配置された木製の柱や棧がアクセントとなっている。備え付けの家具は木材を巧みに使用し、ブラインド代わりに日本風の簾を用いたり、イタリアのアンティークな椅子を置くなど、気に入った品々を国籍を問わず積極的に取り入れている。

アアルトの建築の特徴としてよく指摘されるのは、フィンランドの伝統的な建材である木材を用いたこと、そして建築デザインの中で直線と曲線の絶妙なバランスを保っている点であろう。1928年のパイミオ・サナトリウムのコンペで一等賞を獲得し、一躍有名になったアアルトは、1937年のパリ万博、および1939年のニューヨーク万博のフィンランド館の設計で国際的にも評価を得るようになった。この時期に設計されたのが、フィンランド西部ヌールマルック Noormarkku にあるマイレア邸 (1937-38年) である。全体はL字型の構造であり、白い漆喰と木材が組み合わされた外壁は、緑の多い周囲の環境に見事に溶け込んでいる (図14)。屋内は直線的なグリッド構造を基本にしているが、時折配置されたスチール製の曲線的な柱がアクセントを与えている。

アアルトは日本の障子や格天井を連想させるグリッド構造を採用したり、「借景」のごとく周囲の自然が内部からよく見えるように大きな窓を作るなど、日本の建築や美意識を上手く利用していたが、一度も来日したことはない。1930年代までに日本を訪れたフィンランドの建築家はまれで、彼らもっぱら本と白黒写真から知識を得ていた。一方フィンランドの隣国スウェーデンと日本との関係は古く、江戸中期には博物学者カール・ペーテル・ツンベルク (Carl Peter Thunberg, 1651-1716) が来日している²⁵。19世紀には王族の一人エウシェン王子 (Prince Eugen, 1865-1947) が、日本美術の収集家として知られていた²⁶。アアルトとも親しく、20世紀初頭の北欧で最も日本通といわれるのは、スウェーデン人グンナール・アスプルンド (Gunnar Asplund, 1885-1940) である²⁷。さらにスウェーデンには日本文化、とくに茶道の紹介と普及につとめたイダ・トロチック (Ida Bertha Trotzig, 1864-1943) という女性がおおり、彼女の尽力で建設された茶室はアアルトも眼にしていたであろう²⁸。

そしてドイツ出身の建築家ブルーノ・タウト (Bruno Julius Florian Taut, 1880-1938) の存在も忘れることはできない。ナチス政権に追われたタウトを迎え入れたのが、上野伊三郎を中心とする日本インターナショナル建築会であり、彼は1933-36年にかけて日本に滞在した²⁹。来日直後に案内された桂離宮を始めとして、伊勢神宮や日光東照宮など滞日中に見て回った日本建築について記した文章は、『ニッポン ヨーロッパ人の眼で見た』として1934年に明治書房から翻訳・出版されている。西欧で彼の著作がまとめて出版されたのは死去した1938年以降のことであるが、とくに桂離宮や伊勢神宮などの日本建築を賞賛し、西欧の知識人に影響を与えた。日光東照宮の過剰な装飾性を批判し、桂離宮のシンプルな機能美を評価する彼の言説は、20世紀前半のモダニズム建築の原則につながる。そして歴史的コンテクストや余計な装飾を排除し、建築素材を活かしつつ機能性や合理性を追求するモダニズムの理念は、アアルトに受け継がれていくのである。

2. アアルトのインテリア・デザイン

アアルトは建物の設計ばかりでなく、家具やガラス器のデザイナーでもあった。1935年には仲間と集って「アルテック Artek」というインテリア・ブランドを立ち上げ、「芸術 Art」と「技術 Technology」の融合を目指した同社は、現在世界中に販路を拡大している³⁰。代表的なデザインの

ひとつ《41 アームチェア パイミオ》(1932年)は、木材を曲げる独特の技法を用いた「カンチレバー」と呼ばれるフレームが特徴であり、機能性とともな有機的な曲線を強調したデザインは時代を経ても色あせていない。その根底にあるのは見た目の美しさばかりでなく、素材を活かした機能性の追求であり、彼の建築設計のコンセプトと共通している。そしてアアルトの自邸に置かれた電気スタンド(図15)のように、日本の唐傘あるいは折り紙細工からヒントを得て、誰も考えつかない独自のデザインを生み出したのである。

エピローグ

ここ最近ヘルシンキに建設された建物で、斬新なデザインが注目されているものが複数ある。その一つがカンピ地区にあるカンピ礼拝堂(Kampin kappeli)で、日本の「曲げわっぱ」を連想させるユニークな外観が印象的である(図16)。ルター派教会の礼拝堂として2012年に完成、ヘルシンキに本拠地を置く設計事務所K2SArchitectsが設計を担当した³¹。礼拝堂の外壁にはトウヒ、内壁にはハンノキ、建具や扉にはセイヨウトネリコが使われているが、いずれもフィンランド国内でとれる木材である。

もう一つはヘルシンキ中央図書館(Helsingin keskustakirjasto Oodi)で、独立100周年を記念するメインプロジェクトとして2018年12月5日に開設された(図17)。設計はコンペで選ばれたALA ArchitectsとRamboll Finlan(構造設計)。最上階にはガラスと鉄の構造、それ以外の外壁は木材が用いられ、流線型と直線部分を組み合わせたユニークな外観は、美術館や音楽ホールが建ち並ぶ一画でもひときわ目を引く。1・2階はイベントホールやスタジオ、各種工房等が入り、3階が図書館という複合施設だが、訪れる誰もが利用できる開放的な空間が評価され、2019年度の公共図書館大賞(Public Library of the Year)に選ばれている。

地元でとれる素材を生かした建材、オリジナリティ溢れる外観、そして機能性に優れた開放的な空間というのは、世界中の現代建築における基本的なコンセプトであろう。日本でも隈研吾が那珂川町馬頭広重美術館(2000年オープン)、サントリー美術館(2007年)、根津美術館本館(2009年)、新国立競技場(2019年竣工)で、木材を活かした縦格子を強調したデザインの建物を作っている。モダニズム建築でしばしば使われたコンクリートや鉄筋といった工業的で無機質な建材から人々の心が離れて行ったとき、再び注目されるのは我々の周囲の自然の中にある素材だった。

アアルトのデザインにうかがえる「シンプルなものこそ美しいBeauty of Simplesness」という価値観は、ものが大量に溢れていた時代が去り、本当に必要なもの、大切なものは何かを人々が真剣に考え始めた現代、我々が今後進むべき方向を示すヒントとなるだろう。日本には伝統的に、物質的に貧しい中にも心の充足を見いだす「わび・さび」の精神があり、恵まれた周囲の自然に小さな喜びを見つけるのが日本人だと(ステレオタイプ的に)考えられ、海外における日本文化の評価に

もつながってきた。しかし世の中があまりにも多様化・複雑化し、自分たちが何者かを見失いそうになったとき、一步離れて外側から見るのが有効かもしれない。

「森と湖の国」と形容されるフィンランドであるが、その名にふさわしく自国の森林資源を活かしたシンプルな建物やインテリア・デザインが主流となっている。翻って日本ではどうであろうか。「地産地消」というかけ声は各地で聞かれようになったが、国全体を考えると、さまざまな分野で輸入品が幅をきかせている。人口550万人のフィンランドと日本では、国の規模が違うので一概には言えないが、かの国のように国民のコンセンサスとして、自国の資源をより活用する方策はないものかと自問する昨今である。ジャポニズムの流れの中で日本の文化がフィンランドに浸透して行ったように、フィンランドの文化や価値観が我が国の未来を導くヒントを与えてくれるのだろうか？

註

- ¹ 16世紀からの日本とフィンランドの関係を語るポスターより（フィンランド国立公文書館制作）。
<https://www.japanfinland100.jp/pdf/jp-fin-history.pdf>
- ² *JAPANOMANIA IN THE NORDIC COUNTRIES 1875-1918*,
18 Feb. - 15 May 2016, Ateneum Art Museum, Helsinki
16 Jun. - 16 Oct. 2016, National Museum of Art, Architecture and Design, Oslo
19 Jan. - 23 Apr. 2017, Statens Museum for Kunst, Copenhagen
- ³ *SILENT BEAUTY-NORDIC AND EAST-ASIAN INTERACTION*, 14 Jun. - 6 Oct. 2019, Ateneum Art Museum, Helsinki
- ⁴ 日本・フィンランド外交関係樹立100周年記念「モダン・ウーマン—フィンランド美術を彩った女性芸術家たち」2019年6月18日（火）～9月23日（月祝）、国立西洋美術館
- ⁵ 「北欧の灯り展：照明デザインから見る灯りの文化」2019年9月7日（土）～11月4日（月祝）、小海町高原美術館
- ⁶ *OSAMU TEZUKA-The God of Manga*, 7 Sep. 2019 - 5 Jan. 2020, Tampere Art Museum
- ⁷ National Museum of Finland, 1905-10年に工事が行われ、1916年に一般公開。設計したのは Herman Gesellius, Armas Lindgren, Eliel Saarinen の3人の建築家である。
- ⁸ 画家自身の設計で1911-13年建設。1961年以降はガッレン＝カッレラ美術館として公開している。
- ⁹ 建築家 Lars Sonck 設計で1902-07年に造られたルーテル派の教会。
- ¹⁰ ミンナ・トゥルティアイネン「アクセリ・ガレン＝カレラと叙事詩『カレワラ』」、「フィンランドのくらしとデザイン展」カタログ、2012-13年、青森県立美術館ほか、pp.98-108.
- ¹¹ リョンロートは医師、植物学者、言語学者など多彩な顔をもつフィンランドの作家。
- ¹² Anna-Maria von Bonsdorff, "Correspondences-Jean Sibelius in a Forest of Image and Myth", *Sibelius and the World of Art*, Exhibition catalogue, 17 Oct. 2014-22 Mar. 2015 in Ateneum Art Museum, pp.108-111.
- ¹³ シベリウスの楽曲として「クレルヴォ交響曲 Kullervo」（1892年初演）、「レンミンカイネン組曲 Lemminkäinen Suite」（1896年初演）をあげておく。
- ¹⁴ William L. Coleman, "Sibelius, Gallen-Kallela, and the Symposium: Painting Music in Fin-de-Siècle Finland," *Nineteenth-Century Art Worldwide* 13, no. 2 (Autumn 2014), <http://www.19thc-artworldwide.org/autumn14/coleman-on-sibelius-gallen-kallela-and-the-symposium>.
- ¹⁵ 交響詩「エン・サガ」は1892年に作曲され、シベリウス自身の指揮で1893年2月16日にヘルシンキで初

演された。

- ¹⁶ 「北斎とジャポニスム」展覧会カタログ（2017-18年、国立西洋美術館）p.232.
- ¹⁷ 国芳の錦絵に描かれた真田與市義忠は、石橋山の戦いで源頼朝軍に加わり戦死。江戸時代になると戦記物の英雄として人気を得て、数多くの錦絵に描かれた。
- ¹⁸ *JAPANOMANIA IN THE NORDIC COUNTRIES 1875-1918*, pp.73-74. 画家がどういう経緯で版本を入手したかについては現在調査中。
- ¹⁹ 「万国博覧会の美術」展覧会カタログ（2004-05年、東京国立博物館ほか）参照。
- ²⁰ ミンナ・トゥルティアイネン「アクセリ・ガレン=カレラと叙事詩『カレワラ』」「フィンランドのくらしとデザイン」展覧会カタログ（2012-13年、青森県立美術館ほか）pp.96-109.
- ²¹ たとえば《日本趣味：梅の花》《同：雨の大橋》《同：花魁》（いずれも1887年、ゴッホ美術館蔵）
- ²² 「北斎とジャポニスム」展覧会カタログ（2017-18年、国立西洋美術館）pp.186-187
- ²³ 「厚い布」という意味のフィンランド各地に見られる伝統的な織物。19世紀に復興され、さまざまなデザインが登場した。
- ²⁴ *JAPANOMANIA IN THE NORDIC COUNTRIES 1875-1918*, pp.73-75.
- ²⁵ ツンベルクはリンネの弟子として分類学において大きな功績を残すとともに、出島商館付医師として鎖国期の日本に1年滞在し、日本における植物学や蘭学、西洋における東洋学の発展に寄与した
- ²⁶ ネルケ公爵エウシェン王子は、スウェーデン王オスカル二世の四男。ストックホルムのユールゴーデンにある旧邸宅は、現在美術館になっている。
- ²⁷ *SILENT BEAUTY-NORDIC AND EAST-ASIAN INTERACTION*, pp.155-156.
- ²⁸ イダは夫とともに1889年から33年間日本に住み、茶の湯や生け花を学んだ。1911年には多くの写真や図の入った「茶の湯 *Cha-no-yu, japanernas teeceremoni*」を出版。その後も本国の新聞雑誌に投稿をつづけた。1921年夫の死後に帰国。ストックホルム、ユールゴーデンの北方民族博物館に1935年「瑞暉（ずいき）亭」という屋外の茶室建設を実現した。
- ²⁹ タウトについては、田中辰明『ブルー・タウト 日本を再発見した建築家』2012年、中央公論新社（中公新書）参照。
- ³⁰ 「フィンランド・デザイン展」カタログ（2017年、福岡市博物館ほか）
- ³¹ 設計した建築家は Mikko Summanen（ミッコ・スンマネン）、Niko Sirola（ニコ・サーロラ）、Kimmo Lintula（キンモ・リントウラ）。

【図版リスト】

1. フィンランド国立博物館、1905-10年、ヘルシンキ
2. ガッレン=カッレラの自宅兼アトリエ「タルヴァスパー」、1911-13年、エスポー
3. ガッレン=カッレラ《エン・サガ（ある伝説）》1894年、油彩・カンヴァス、アイノラ財団、ヤルヴェンパー
4. ガッレン=カッレラ《アイノ神話》1891年、油彩・カンヴァス、アテネウム美術館、ヘルシンキ
5. ガッレン=カッレラ《サンボの防衛》1895年、木版画、アテネウム美術館
6. 葛飾北斎『北越奇談』挿絵 1813年 墨刷 個人蔵
7. ガッレン=カッレラ《サンボの防衛》1896年、テンペラ・カンヴァス、トゥルク美術館
8. 歌川国芳《耀武八景・石橋山秋月》1843-47年、錦絵、アテネウム美術館
9. ガッレン=カッレラ《サンボの防衛》1928年、フレスコ、フィンランド国立博物館
10. 歌川広重「名所江戸百景」より《堀切の花菖蒲》1857年、錦絵
11. ガッレン=カッレラ《野生のアンジェリカ》1889年、油彩・カンヴァス、アテネウム美術館
12. ハロネン《雪に覆われた松の若木》1899年、テンペラ・カンヴァス、アテネウム美術館

13. エクルント《カモメ》1904年頃、ルイユ織ラグ、デザイン博物館、ヘルシンキ
14. アアルト設計「マイレア邸」1937-38年、ヌールマルック
15. アアルト《電気スタンド》制作年不詳 アアルト自邸
16. カンピ礼拝堂、2012年竣工、ヘルシンキ
17. ヘルシンキ中央図書館、2018年オープン、ヘルシンキ

【photo credit】

@Ainolo Foundation, Järvenpää-fig.3

@Ateneum Museum, Helsinki-fig.4, 5, 8, 11-12

@Design Museum, Helsinki-fig.13

@Turku Art Museum-fig.7

@Uragami Sokyudo Co., Ltd, Tokyo-fig.6

筆者撮影 -fig.1, 2, 9, 15-17



図 1



図 2



図 3



図 4



图 5



图 6



图 7



图 8



图 9

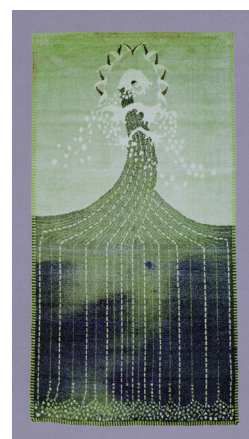


图 13



図 10



図 11



図 12



図 14



図 15



図 16



図 17